本書は昭和二十六年に日本出版協同株式会社から『宮廷』として刊行されたものをもとに、令和五年一月二十六日に著作権法第六十七条第一項の裁定を受けて制作しました。改題の上、読みやすさを考え一部表記を改めました。文中に今日からみれば一部不適切と思われる表現がありますが、時代背景を鑑みそのままといたします。

著者のことば

私の父、佐之次は三石※の城主宮部善十坊の家から、岡山池田藩の家臣小川家へ養子に入ったものである。父は郷里では小学校の訓導をしていたが、私が五、六才の時一家をあげて上京した。

父は武家の出であったために、子供の躾には厳格であった。後年私が仕人になって、下積みの、しかも実質的には苦労の多い生活に耐え得たのも、この子供の頃の父の躾に負うところが多い。私は中学三年まで学んだが、病気のため止めて、しばらく宮内省御料局※（新宿御苑の前身）の園芸塾に通った。その後鉄道学校に入学し、そこを卒業すると九州鉄道に入った。しかし、三年ほどして休暇で帰京した際、家の事情のため宮内次官花房義質※氏の紹介で、改めて宮内省に入り、仕人となったのである。明治四十一年であった。

その時には四年間という約束であったが、その後明治陛下の崩御に遭い、大正天皇の御代となってからは、両陛下の行幸啓に供奉してあちこちに行き、多忙に

三石
現在の岡山県備前市。

宮内省御料局
一八八五年設置。皇室財産の管理などを行った。一九〇八年に帝室林野管理局、一九二四年に帝室林野局に改称した。

花房義質
岡山藩出身、外交官や農商務次官、帝室会計審査局長などを経て宮内次官。

追われているうちに、自然退職の時機を失してしまい、若い頃の夢や抱負も宮中にささげて、とうとう二十五年間も大奥に仕えたのである。

仕人という役目は本文をお読みになればわかるが、私はしかし役目は役目とし、自己は自己として、宮中のことを比較的冷静に、正確に見てきたつもりである。ところが終戦後、言論の自由の蔭にかくれて、皇室に関するいかがわしい文章が雨後の筍のように出て世間に広く読まれ、かつ信ぜられているようなむきがあるのを知り、私自身一種の感慨を懐くに至った。私は静かに過去の記憶をたぐり寄せ、事実であると確信のつくもののみを選んで書いてみることにした。もっとも見解の相違とか、噂に過ぎぬ場合もあるが、それはそういう事柄が、大内山※の奥深くに何かしら関係があって、それはそれなりにある歴史的な価値をもつと考えられる噂だけに限った。

また、皇室の民主化というようなことも言われているが、皇室について何事も知らなければ、今日の御模様が以前に比べてどれほど民主化されたのか、またその民主化がどれほど困難なものであったのか、ということなどについても、明白には理解することができないであろう。

大内山
皇居のこと。

幸い本書が国民の皇室理解に幾分でも参考になれば、筆者として望外の幸せである。

なお、眼の不自由な筆者に代わって、熟知の引田春海※君が本文を草してくれた。付記してここに厚い謝意を表する。

昭和二十六年六月

小川金男　識

引田春海
一九一四年鳥取県生まれ。戦前に北京を中心とする日本人文学結社「燕京文学会」に参画。

皇室の茶坊主

下級役人がみた明治・大正の「宮廷」

目次

著者のことば 3

第一部 仕人（つこうど）

仕人となる 30
仕人のつとめ 34
初めてお供した鴨猟（かもりょう） 39

第二部 女官

制度と階級 48
局（つぼね）（女官の部屋） 53
百間（ひやけん）廊下風景 57
女官候所（こうしょ）付近 59
女官の生活 62
御納戸売（おなんどばい）／服装／外出／間食／恋愛・結婚／針女（しんめ）の悲喜劇／月を覗く部屋子（へやこ）
早乙女（さおとめ）の内侍（ないし） 76
初雪内侍 85
御産殿秘話 94
葛藤
明治・大正女官始末記 98

第三部 皇室・皇族の御生活

御殿 114
皇居の御模様／表御座所（おもてござしょ）／御常御殿（おつねごてん）
陛下の御日常 121

今上両陛下のこと 125
御歌所と御歌会始 127
三大節の御陪食 129
行幸啓 134
御出発／お身回り品／供奉の人員／大正十一年の九州行啓／転轍手の自殺事件
新嘗祭 145
皇室の御挨拶 151

第四部 禁裡習俗

禁裡習俗 158
御厠場の御厠曳き／釜なしの御湯殿／大清・中清／「御舟」と「ずり板」／煤掃き／〝雉酒〟／「小頂」と「三日餅」／桑飯とおゆのこ／御紋章入りの煙草／御下賜金三円也／お片身分け／三種交魚／御出産の検視／皇室ならびに皇族の御降嫁／皇族・華族の御内所／雅楽と能楽／犬になっても大所／紅葉山の狸／〝手柄〟話二つ

第五部 皇室御三代

明治天皇 192
女官の乗った鞍／陛下の御寝所／大津事件／皇太子殿下の拝謁問題／陛下の御趣味
大正天皇 202
大正天皇御成婚余話 215
皇太后陛下（貞明皇后） 221

吹井戸のクレソン／陛下の御生母／皇太后陛下となられて／良子女王色盲事件
秩父宮 236

第六部 三代禁裡秘話

日清戦争開戦秘話 246
風の三条実美公 249
天盃恩賜と将校副馬の由来 256
明治版曽呂利新左衛門 258
明治天皇と乃木大将 262
陛下の御発病を知る／陛下の崩御と乃木大将の態度／御大葬と乃木大将の殉死
徳大寺侍従長 276
天狗党の志士 279
元老会議 282
山縣有朋元帥 286
君が代を知らぬ一木宮内大臣 289
難波大助事件――かくれた悲劇―― 295
大森皇后宮大夫と蜂須賀侯 298
劔璽案哀話 304
秩父宮に叱られた西園寺八郎氏 306
宮内省の変遷 310
宮内省の官制／側近ということ
解説 河西秀哉 315

明治天皇

昭憲皇太后

大正天皇

大正天皇

同　幼少時代

明治四十三年（1910）日韓併合の際、皇太子渡韓記念

仕人となる

いよいよ私は仕人になることになったのであるが、私が宮内省に入るのはこれが最初ではない。その前に私は宮内省の御料局に入っていたことがある。御料局というのは今の新宿御苑の前身で、当時は植物園のようなものだった。ここで初めて、その頃では珍しかった外国種の草花なども栽培され、それらの草花は宮中の御用にあてられていた。私はこの御料局の園芸塾の生徒になったわけであったが、ときどき宮内省に御用の草花などを持って出入りしていたのである。

そういうわけで私は、宮内省に入って仕人になることになっても、世間一般の人のような特殊な畏敬の感じをもつこともなかった。しかし、その朝、内匠頭小笠原武英※さんから次のような訓辞を与えられると、やはりほんとうに陛下の御身近くにきたという感じがして、一瞬緊張した感動を覚えたものである。それは、「仕人は、階級は低いが、役柄はまことに重大である。服装には十分気をつけて、他官庁の模範となるよう。みだりに宮中のことを外部に話してはいけない。

内匠頭
内匠寮は宮殿その他の建築物の保管、建築・土木・電気・庭苑および園芸に関する事務を担当する宮内省の部局で、内匠頭はその長官。

小笠原武英
長門清末藩出身。明治期の宮内官僚。

もし下宿などするような場合があれば、なるべく人目につかない閑静な場所を選ぶよう。」

といったようなものに記憶しているが、当時明治陛下への国民の感情は大変なもので、まるで生神様というように見ていたのであるから、私がその時どのような気持ちになったかは、想像ができようというものである。

ところで、私が初めて仕人の詰所に入った時には、一寸意外な感に打たれた。仕人の詰所といっても特別なものではなく、内匠寮の中の普通の洋間で、官庁の事務所とたいして変わりがなかったが、その十畳ばかりの部屋の中に事務机があって、そこで属官※が事務をとっている。そして部屋のあちこちに群がって仕人たちが話をしている。ちょうど大きな官庁とか会社とかの小使部屋といった感じであるが、変わっているのはその仕人がいずれも金ボタンのついた黒ラシャのフロック・コート※を着て、紐のない黒の短靴をはいていたことである。このフロック・コートのことを普通「仕人マンテル」と呼んでいるが、そのいかめしい立派な服装をしている仕人たちが、何やら話をしているのを聞くと、それが、どうも「べらんめえ」口調なのである。私はいわば一寸緊張していた時でもあり、

属官
明治の官制で、各省などの官庁の職員の一つ。上官の指揮を受けて庶務に従事。

フロック・コート
十九世紀中頃から二十世紀初頭にかけて使用された昼間の男性用礼装。

仕人という身分や職務に何か特別な厳粛なものを感じていた時でもあったので、「ほほう！」といった一種呆然とした気持ちになった。そういう気持ちで部屋の中を見回していると、部屋の中央の壁につけられてある西洋式の暖炉（カーヘル）を囲んで話している人たちが目にとまった。その中の一人は、やにわに手の平で鼻の下をこすりあげるようにすると、

「だってお前（め）ぇ、そりゃ仕様がねえじゃあねぇか！」

と表情たっぷりに言い放ったので、私はがっかりしたような、自尊心を傷つけられたような妙な気がしたものである。ところですぐ後でわかったのであるが、その鼻の下をこすった男が、当時、仕人の取り締まりをやっていた小林伴という人であった。

当時の仕人たちがどうして「べらんめえ」口調で話していたかというと、一つには宮中という一般社会から隔絶した特別な雰囲気に生活していて、お互いが似た様な階級の出身であるから、そんな言葉も別に変に感じられなかったのであろう。彼らの多くは、地方の勤王藩の江戸詰の藩士たちであって、ここにも当時の政治勢力であった薩・長の流れがあり、仕人の中では長州のものがなかなか幅を

きかせていた。

私は仕人マンテルを支給されると、隣の部屋に案内されて、そこの一段高くしてある畳の間と床との間を利用して造られてある簞笥（たんす）の一つをあてがわれた。この簞笥には仕人たち銘々の名前が貼りつけてあって、この中には支給された服やその他日用品を入れておくのである。その他に私は敷布団一枚、毛布五枚を支給された。これは当番の日にこの寝室で寝るためのものである。

さて、私は早速仕人マンテルに着替えて、短靴をはくと、事務をとっている属官の前へ行って、その日の仕事を割りあててもらったのである。宮中の奥深く歩くのは初めてのことであるから、なんとなく心許ない。その日は先輩の仕人のお供をして、廊下や各部屋に設けてある暖炉に火をたくために、薪（まき）をバケツに入れてついて行ったが、長い廊下はほの暗く、人気もなく、静まり返っている。部屋も廊下も堅い木のモザイクで、歩き馴れないものにとっては一寸でも油断すると滑ってころびそうになる。私は爪先で音のしないように、滑らないように、戦々兢々（せんせんきょうきょう）としながら先輩が悠々と体の調子をとりながら歩いてゆくのに従った。この日以来、私の歩く様子は普通の人とは違った。仕人だけが身につける一種特別

な、ふわふわしたような、それでいて安定感が保たれている歩き方になったのである。

仕人のつとめ

これから、いよいよ仕人である私は、世間では到底想像も及ばない宮中の生活に近づき、宮中ならでは起きえない出来事を見聞きすることになるのであるが、その前に一応仕人とはどんな役目をするものか、説明しておく必要があるであろう。

前にも書いたように、暖炉を燃やすのも仕人の仕事ではあるが、その他に年功やら体格やらその向き向きによって、仕人の仕事も変わり、複雑となるのである。

毎日決まった仕事としては検番がある。これは御殿の各所に一定した場所があって、ここに一時間交替で立つのである。この検番の場所は、宮殿の入口や車寄せその他の大切な場所で、離宮などもそうだが、廊下の曲がり角には白木の柵があって、そこには必ず無地の金屏風が置いてある。陛下がお通りになる場合には、仕人は扉の内側にかくれてしまうので、もちろん陛下は仕人の姿を御覧になることはないし、仕人もまた絶対に陛下のお姿をお見かけするようなことはないのである。明治の時代は、私はまだ新参で、奥に接近する機会も少なく、直接明治陛下を目の前に拝したことはなかったが、検番に立って、度々陛下の足音だけは聞いた。陛下がお通りになる前には、普段とは違った特別な雰囲気を感じるものであるが、私達仕人はそれを敏感に嗅ぎ分けると、すぐ扉の裏にかくれてしまうのである。そして、じっとしゃがんでいると、やがて靴音と剣の打ちつける音とが聞こえてくる。その靴音は重々しく、ゆっくりと大股である。随行の侍従長※などの靴音も聞こえるが、それは陛下の靴音を引き立てる伴奏のようなもので、私の耳に入るのは拍車の音の入りまじった陛下の靴音のみである。私はこんな時、何か威厳に打たれるような感じがして、誰も見ていないのにひとりでに頭を下げたものであった。この時の仕人の服装は白ネクタイの小礼服である。

この検番について、私は先輩の日並という仕人から面白い話を聞いた。それは芝離宮での話であるが、香川さん※が皇后宮大夫※の頃であった。皇后陛下が芝離宮へお成りになって、香川さんの先導で廊下を渡ってゆかれたが、廊下の曲がり角

侍従長
侍従は天皇に付き従い、身の回りの世話などをする。侍従長はそれら侍従を統括する役職。

香川さん
香川敬三。水戸藩出身。宮内省で役職を歴任した。

皇后宮大夫
皇后宮職は宮内省内の皇后宮に関する事務をつかさどる部局。大夫はその長官。